

○橋本直樹<sup>1)</sup>・石原稔郎<sup>2)</sup>  
 (熊本農研七天草<sup>1)</sup>・鹿本普及<sup>2)</sup>)

【目的】

早期水稲後、ほ場の高度利用の観点から、早期水稲と組み合わせ可能な新規野菜品目として露地スナップエンドウの栽培を確立する。

【材料及び方法】

試験1(2003年度施肥試験)：品種は‘ニムラスナップエンドウ’を供試した。試験区は多肥区:N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=2.0:2.7:2.0kg/a, 中肥区:N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=1.0:1.3:1.0kg/a, 小肥区:N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=0.5:0.7:0.5kg/aとし、被覆尿素(120日タイプ)を用いた基肥1回施肥とした。播種は9月17日に行い、収穫は11月7日～翌年1月末まで行った。

試験2(2004年度霜害低減試験)：品種は‘ニムラスナップエンドウ’を供試した。基肥については、前作の結果から多肥区が最も多収だったが、総収量で中肥区との差は小さく、また後作の水稲に倒伏が見られたため、N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=1.0:1.3:1.0kg/aとした。試験区は①黒ポリ(0.05mm)②透明ビニル(厚さ0.03mm)③ポリプロピレン長繊維不織布(パオパオ90)④ポリビニルアルコール割繊維不織布(タフベル4000N)⑤無処理とした。(低温・霜注意報の発表時の対応として資材を支柱上から被覆)播種は9月3日に行い、収穫は11月5日～翌年1月末まで行った。

【結果及び考察】

試験1：収穫終了時草丈は各区140～150cm程度と施肥量による大きな違いは無く、草勢についても著しい違いは観察されなかった。(表-1)

収量については多肥区において収穫初期から収量が多く、中肥区、少肥区の順で収量が施肥量に比例する傾向であった。(表-2)

しかし、多肥区における後作の水稲については、倒伏が見られた。(表-3)

試験2：被覆資材を用いても、無処理と比較し

て、霜害の低減を行うことはできなかった。逆に被覆することで霜災の発生が増加した。(表-3)

害虫については、ヒラズハナアザミウマを中心に防除することで、被害は低減できた。

以上により、早期水稲後作としての露地スナップエンドウは9月上旬播種で11月上旬から降霜時期まで収穫でき、ハウス長期栽培の出荷量が少ない年内に100～150kg/a生産可能である。

表-1 施肥量による収穫終了時草丈

区名	1区20株	
	草丈 cm	
多肥区	146.7	
中肥区	141.8	
小肥区	149.7	

表-2 施肥量による収量

区名	1区45株			*総収量 kg/a
	商品莢 重量(kg)	下物莢		
		霜災(kg)	病害虫他(kg)	
多肥区	6.1	5.7	3.4	141
中肥区	5.4	6.8	2.8	139
小肥区	5.3	6.0	3.0	133
*417株/a				

表-3 施肥量と次年度水稲作の影響

施肥量	スナップ エンドウ 収量 kg/a	次年度水稲	
		精玄 米重 kg/a	倒伏 程度 0～5
窒素2.0kg/a	141	66.0	2
窒素1.0kg/a	139	61.5	0
窒素0.5kg/a	133	57.8	0

表-4 被覆資材による収量

区名	1区50株			*総収量 kg/a
	商品莢 重量(kg)	下物莢		
		霜災(kg)	病害虫他(kg)	
黒ポリ	21.4	0.6	2.3	203
透明ビニル	19.6	0.7	2.1	187
パオパオ90	18.8	0.9	2.0	181
タフベル4000N	21.1	0.4	4.8	219
無処理	21.5	0.2	2.8	204
*417株/a				